

O2-041

総合病院における子どもの権利を守る取り組みについての実践報告

北野 京子、関谷 真一郎

泉大津市立病院

【はじめに】

医療を受ける患者の権利として、「人格が尊重される権利」、「平等な医療を受ける権利」、「最善の医療を受ける権利」、「安全な医療を受ける権利」、「自己選択と自己決定の権利」などが広く知られている。しかし、それらはおとなを対象としたものが多く、医療者は子どもに対しそれらの権利を守る責務を果たしているか疑問である。当院では、「女性と子どもに優しい病院」を目標としており、子どもの権利を擁護できるような取り組みを始めた。

【目的】

当院での子どもの権利を守る取り組みについての実践報告と、今後の課題を明らかにすること。

【方法】

当院では2015年から外来で術前検査を受ける子どもに対し、何の検査を受けるのかが理解でき、楽しみながら検査を受けてもらえるようにシールラリーを行っている。他にも、手術室ではキャラクター人形が患者を迎え入れるような工夫をしている。点滴確保時には、好きな絵柄のシーネを選んでもらうなど、子どもが処置に対して主体的に参加できるよう取り組んでいる。それらの取り組みに対し、保護者や子どもの意見について聞き取り調査を行った。

【結果】

保護者からは「楽しみながら検査を受けることができた」、「シールラリーをしていると聞いて(当院を)受診した」などの意見があった。子どもからは「採血は嫌だったけど、シールを貼るのが楽しかった」、「(検査室の)漢字が読めなかった。わかるように印がついていたら良かった」などの意見があり、子どもが検査を主体的に受け入れていた。

【考察】

今回、シールラリーを通して検査の説明を行い、シールラリーの台紙やシールを子ども自身に選んでもらう取り組みを通じて、言葉だけの説明が理解することが難しいような子どもに向けても、「患者の知る権利」、「参加する権利」を尊重できるようにした。シールラリーを終えた後、笑顔で戻ってくる子どもが増えたことを実感できた。子どもの「頑張った」という反応を見ることで、保護者は子どもの頑張りに感銘を受け、また、関わった看護師も子どもと保護者の反応から、達成感を持つことができた。外来の看護師は、シールラリーを通して子どもへの検査の説明を行っているが、検査を受ける場面では、検査場所の医療者に子どもの対応は任される。今後の課題として、どの職種であっても子どもの発達段階に適した対応を行い、病院全体で子どもの権利を擁護していくことが必要と考える。

O2-042

侵襲的処置を受ける子どもの権利を尊重した関わり—アクションリサーチを通じた看護師の意識とケアの変化

市川 聡美、猪熊 茉莉、宮崎 真生、山下 香苗

大阪府立急性期・総合医療センター

【目的】

A病棟では、緊急入院が多く身体的状況から医療行為が優先されることが多い。しかし、幼少の子どもであっても、意志を尊重し主体的に治療へ参加できるよう支援しなければならない。その実践に向けては看護師の意識の変化が求められ、段階的に研修を行った。今回の研究目的は、研修を受けた看護師の侵襲的処置を受ける子どもの権利尊重に対する意識とケアの変化を明らかにすることである。

【方法】

研究デザイン：アクションリサーチ

実施方法：A病棟の看護師に対しアクションとしての研修を5回実施。研修毎のアンケートと、すべての研修終了後に半構成的面接法にて看護師の意識とケアの変化を問い、得られたデータは質的記述的分析を行った。

倫理的配慮：当該施設の看護研究委員会による倫理審査での承認を得た。

【結果】

1. アクションの内容と看護師の反応

1回目の内容は医療の中における子どもの権利保障で、参加者の意見は、緊急性の高い子どもが多く難しいであった。2回目の内容は子どもの権利保障とその実践方法。参加者の意見は、子どもと一緒に対処方法を考えることが大切、場所も時間も無い中でどうしたらよいかわからないであった。3回目の内容は処置を受ける子どもへの具体的な関わり方、参加者の意見は、時間がなくても子どもの思いを聞き一緒に取り組む姿勢が大切、実践できるか不安であった。4回目の内容は処置を受ける子どもの反応の捉え方、関わり方。参加者の意見は、怖さをそらす方法や家族との協力方法を知ったが、家族との協力に不安があった。5回目の内容は処置に向けた子どもと家族への説明方法とした。

2. 看護師の意識とケアの変化

すべての研修を行った後の面接より、侵襲的処置を受ける子どもの権利尊重に対する看護師の意識とケアの変化では22のカテゴリーと57のサブカテゴリーを抽出した。

【考察】

研修前の看護師は、ジレンマを抱えながらも今までの慣習に依拠し子どもの反応を捉えられず、抑制して処置を行い医療者の判断で処置方法を選択していた。研修後、看護師は自身のケアが子どもの最善であるかを考え、子どもの反応を意図して捉え、子どもに寄り添おうとしていた。これは医療者主体から子ども主体へのケアに変化したことを示す。さらに、子どもの反応の変化や一人ひとりのケアの変化がチーム全体の変化として実感され、より子どもの権利を尊重した実践への動機付けとなっていた。